



## つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 190号 2010.11.8 発行 社会政策研究所

=====

知的障害者の元気な支援事例を全国から集めてみました。【kobi】

### 安心築いた自信作 障害者施設の食パン



朝日新聞 2010年11月08日  
焼き上がったばかりの「大吟醸 パン職人」。すぐ売り切れる人気＝横浜市緑区 牛乳とはちみつでリッチな味わいの自信作

横浜市緑区北八朔町にあるパン工房「しろくまのパン屋さん」。昼前になると、たくさんのパンが焼き上がる香ばしいにおいが漂う。



一番人気は「大吟醸パン職人」と名付けられた食パン。焼きたてを手でちぎると、中はもっちりとしてしっとり。口に入れると、濃厚なのに優しい味わいが広がる。最高級的小麦粉を使い、水の代わりに牛乳、砂糖の代わりにちみつを使ったちょっとぜいたくな一品。一斤350円と高めだが、すぐ売り切れる。

このパンを作るのは、知的障害者福祉施設「愛」の利用者とスタッフ。「大吟醸」だけでなく菓子パン、調理パンなど毎日50種類ほどを焼き上げ、本店と青葉区役所など計3店で販売している。

1988年、「愛」の開所と同時にパンと喫茶店を始めた。そのころ、食べ物を扱う障害者施設はほとんどなかったが、当時の職員が「パンと喫茶店を作れば、毎日営業するから地域の人とのふれあいも多くなる」と考えた。

とはいえパン作りは素人ばかり。まず職員がパン作りの研修を受け独自のレシピを開発。材料は地元産も活用し、良質なものを厳選、ハンディを持っている人でも作りやすいパンを模索した。

98年ごろ、目玉になるパンを作ろうと「大吟醸」が考案された。牛乳とはちみつの配分が難しく、商品化するまで数カ月かかった苦心作だ。

「変なものが入ってなくて安心」と離乳食代わりに子どもに食べさせる若い母親、「焼きたてを食べたいから少し切って」と、買ってすぐその場で数枚食べていく男性など固定ファンも増えた。

ただ逆風も多い。08年、小麦粉やバターなど原材料が高騰し赤字に直結した。今年2月には区役所駐車場が有料化。パンの購入や喫茶店の利用だけでは駐車代が必要になり、売り上げが落ちた。

それでも、22年で築いた「おいしさと安心」をこれからも広めたい。みんなの思いは変わらない。(斎藤博美)

### 障害者施設の手作り菓子 パチンコ店景品に

徳島新聞 2010年11月8日

徳島市名東町3の障害者施設・地域活動支援センター「ほっとハウス」の通所者が作った菓子が8日から、パチンコ店「ミリオン」の3店舗で景品になる。ミリオンを運営するノヴィル(徳島市)によると、パチンコの景品に障害者施設の商品が使われるのは珍しく、同社では初めて。通所者らは「活動を多くの人に知ってもらえるきっかけになれば」と張り切っている。

菓子は手作りのクッキーやマフィンで沖浜、中吉野(ともに徳島市) 鴨島(吉野川市)の3店舗に置く。各店のカウンターには施設の紹介文も掲示する。

ノヴィルは毎月計300袋を買い取り、仕入れ値と同額の一袋100円の景品にする。「国際支援やお金だけの寄付より、地域の頑張っている人たちを応援したい」と担当者は話す。客の反応が良ければ、菓子以外にも、通所者が作っている小物類を扱うことも検討している。

ほっとハウスでは12人の知的障害者が菓子作りを中心にした活動をしている。出来上がった菓子はこれまで、徳島市内の県立障害者交流センターやふれあい健康館で委託販売してきた。しかし売れ残ることも少なくはなく、安定的な販売先の確保が課題だった。



県外の作業所がパチンコ店でクッキーを販売して成功した事例を知り、松本千鶴理事長(58)が提案。取引があった知人を通してノヴィルに持ち掛け、快諾を得た。

「大きな注文が来たという喜びで、メンバーはみんな張り切っています」と松本理事長。納品日の8日は、朝から作業をし、焼きたての菓子を届けるという。

【写真説明】クッキーを手作りする通所者=徳島市名東町3のほっとハウス

## ニンニク畑で地縁はぐくむ / 障害者と住民交流

四国新聞社 2010年11月7日



琴平町社会福祉協議会が整備した畑でニンニクの種の植え付けを一緒に行う児童や障害者ら=香川県琴平町上櫛梨

ニンニクの生産量が全国2位の香川県琴平町で、町社会福祉協議会が遊休農地を活用したニンニク栽培を通じ、障害者の自立支援や住民交流を図る取り組みを始めた。町内の心身障害者小規模通所作業所「ねむ工房」の通所者が畑を管理し、地元の子どもや高齢者らが交流行事として種の植え付けや収穫に協力する仕組み。町産ニンニクのブランド化を目指す生産農家や農協も支援し、地域ぐるみで活動を展開する。

同協議会が2009年7月から販売している食用油「ガアリック娘」の売り上げが好調なことから、この機運を農業振興や社会福祉の充実につなげようと計画。県農協象郷支店(同町)や町などと内容を協議してきた。

畑は、同協議会が同町上櫛梨の遊休農地約2500平方メートルを無償で借り受け、うち約1千平方メートルでニンニクを栽培する。4日には近くの象郷小の3年生36人が、ねむ工房の通所者らと約1万5千個

このほか、ねむ工房の新たな加工作業所を畑近くに設け、今後、周辺の高齢者向けに同所での催しも構想中。畑の残る区域でも野菜を育て、通年の取り組みとなるよう工夫するという。

全国社会福祉協議会によると、地方協議会が独自に農地を借りて事業展開する事例は国内で初めて。琴平町社会福祉協議会は「観光に隠れがちな、琴平の農業にもスポットを当てることで町内が盛り上がってくれば」と期待している。

## 障害者とプロ音楽家が協働 「音遊びの会」活動5年

神戸新聞 2010年11月7日

五感を揺さぶるリズムに乗って体が自然と動き出す=神戸市中央区小野浜町、旧神戸生糸検査所(撮影・



大山伸一郎) ビートを刻む。体中に喜びがあふれる = 神戸市中央区小野浜町、旧神戸生糸検査所(撮影・大山伸一郎)

感性のまま表現される旋律やリズムにプロが音を重ねる。神戸を拠点に活動する「音遊びの会」は、知的障害者とミュージシャンでつくるバンドだ。独特の価値観で障害者が奏でる音は、骨太かつ予測不可能。楽譜も定形もない演奏会が、神戸の音楽シーンを震わせる。

10月下旬、神戸市中央区の旧神戸生糸検査所であったライブ。総勢40人の楽団を指揮するのは、知的障害のある永井崇文(たかふみ)さん(23) = 同市東灘区 = だ。思いのままに振る腕に呼応するように、メンバーがギターをかき鳴らし、ドラムを激しく打つ。客席の130人からわき上がった拍手や口笛を背に受け、永井さんが軽快なステップを踏んだ。

同会は2005年、神戸大大学院で音楽療法を研究していた沼田里衣(りい)さん(32) = 同市灘区 = らが、障害者の家族の会やミュージシャンに呼び掛けて結成された。当初1回だけの予定だったライブは、障害者の保護者の声を受けて継続。以来、約20回をこなしている。

すべての曲に楽譜がないため、再現はほぼ不可能。障害者が生み出す奔放な音に刺激され、プロの音楽家も多彩な音色を響かせる。実験音楽やノイズミュージックで知られる大友良英さん、旧グッゲンハイム邸(同市垂水区)でライブなどを手掛ける森本アリさんらの参加もあって、会の存在は一般の音楽ファンにも一気に広がった。

沼田さんは「障害者への音楽療法の実践ではなく、どんな音楽が生まれるか分からない、ステージの即興性を追求している」と話す。

今年会の活動初期に密着した映画「音の城 音の海」が東京や神戸、大阪などで上映され、今も各地で自主上映が続く。

「ほかの人にどう聴こえるかは全然分からない。でも少なくともオレにとっては宝物のような音だ」。大友さんが映画に寄せたコメントだ。今後の予定などは同会のホームページで。(黒川裕生)



## さあ楽しくにぎやかに「障害者音楽祭」 熊本市

熊本日日新聞 2010年11月7日  
一緒に音楽を楽しむ熊本市の豊田小児童と「くまむた荘」の入所者たち = 県立劇場

障害者団体や福祉施設の入所者らが音楽を通して地域の人と交流を楽しむ障害者音楽祭「マインド・ハーモニー・コンサート」が7日、熊本市の県立劇場であった。障害者と小学生、地域住民ら約1000人が歌ったり、楽器を演奏したりして楽しんだ。障害者の社会参加を促そうと実行委が毎年開き19回目。



南関町の知的障害者更生施設うすま苑の竹太鼓演奏で幕開け。リズムに乗った振り付けを披露し、会場から手拍子が起こり、一体感に包まれた。

身体障害者支援施設くまむた荘(同市城南町)は、地元の豊田小4年生とカーペンターズの「シング」。障害者によるタンバリンやハーモニカなどの演奏と、児童たちの合唱で、息の合ったハーモニーを披露した。

10年ぶりに訪れた郷鶴雄さん(86) = 同市 = は「上手下手にかかわらず、障害者と健常者がにぎやかに音楽を楽しんでいる雰囲気がいいですね」と話していた。

津軽三味線奏者の高崎裕士さんによる演奏や、施設が作った野菜などの展示販売もあった。(樋口琢郎)

以上